

4年間お世話になった部屋を出るため、きのうから荷作りを始めた。部屋のどこにいても電話のコールが2回鳴り響くあいだに必ず手が届くくらい狭い部屋だが、物の多さには改めて驚かされてしまう。

昨晚のことだった。棚から『Hakumon chūouō』がこっそり出てきた。それはきちんと発行順に並べられてもいないし、冊数もバラバラで雑然と置かれていた。私は活そのものであり、例え同月号が何

同じものでも
片づけられず



大谷 秀之

要らない本と残しておく本を分ける作業を急いでいた。ほかの棚は直ぐに仕分け出来たが、この『Hakumon chūouō』の山だけは、その場で手が止まってしまった。

同じ発行月のものを8冊も持つていても仕方ないので何冊かは処分できる。しかし、表紙を見ただけで、自分が書いた記事はもちろん、仲間が書いた記事も自然と頭のなかに浮

かんでくる。盲学生の河野君を取材したり、はるばる四国まで和釘職人の白鷹さんに会いに行けたのも、学生記者をやっていたからこそ、と感謝している。昨年、ある学生記者が広島での教育実習に行った自分の体

験を書いた記事も、中学生の素朴な表情が伝わってくる、私の印象に残る内容だった。こう振り返ると『Hakumon……』は、私の大学生

冊あるうとも、1冊も処分する気になれない。結局、棚の『Hakumon……』は、すべて「残しておく本」となった。

この記事が学生記者として最後の記事となったが、いままで取材の都度、温かい励ましの声をかけてくださった広報課の皆さまに、心から感謝します。4年間、ありがとうございました。

文字の優しさ、知った学生記者

中央大学は広い。それはキャンパス内にトンネルが2つもある広大な敷地、というだけではない。大学という枠組みがとても大きく、かつ緩やかなもので、ほとんどすべてが自由である。

私は学生記者になったことで、大学生活に対しての自分の視野が大きく広がった。おかげで私の大学生活はとても充実したものとなり、中大で4年間を過ごして本当に良かった

自分の周囲に
気をつかおう



玉井 安子

と心からいえる。振り返れば、実にたくさんの方をさせてもらった。白門祭、新学長インタビュー、就職座談会、水泳の五輪代表選手の取材、硬式野球部が10年ぶりの東都1部リーグ復帰を賭けたシーズンを追ったりもした。

この広い大学のなかで、さまざまなお人様が活躍している。現実というものは厳しく、思い通りにいかないことが多いだろうが、そういう時こそ、自分とその周りをしっかりと見つめていかねばならないと思う。

最後に、学生記者の活動を温かく見守ってくださった職員の方をはじめ、すべての大学関係者の皆さまに感謝いたします。

大都會の真ん中に世界貿易センタービルが、易々と崩壊していく。これまで連綿と築き上げられてきた西洋文明の歴史をまるであざ笑っているかのように。ハリウッド映画のワン・シーンのような9月11日の映像は、瞬く間に世界に発信された。

街のどよめき、人々の悲痛な叫び、恐ろしい現場の雰囲気を感じながら私の頭のなかで、ある過去の衝撃がフラッシュ・バックしている。

卒業後も同じ歩幅で歩こう



友松 千穂

た。91年の湾岸戦争時のテレビ映像である。私が最も衝撃を受けたことは、現実の戦争の映像をリアルタイムで目の当たりにしながら、まるでフィクションの世界を見せられているかのような感覚に陥ったことだった。要するに、テレビに映るミサイル映像を現実のものとして感じられなかった。「事件は、現場で起きているだ!」。蹴って歩いていきたい。

大学2年の春から今日まで、学生記者活動を続けた最大の収穫は、取材を通して実に多種多様な価値観と直に接することができたということだろう。それは取材対象者だけでなく、取材を共にした学生記者の仲間や記事を読んで感想を聞かせてくれた友人も含んでいる。

9月11日の惨事直後のパニックから、世界は落ち着きを取り戻しつつある。しかし、心に深く刻み込まれ

たショックは容易に消えてくれない。この危機感を単なる杞憂に終わらせ

ないために、心と頭を柔らかくしておこう。そのためには、まず好き嫌いをいわずに、どんな所にも足を向けてみるだろう。踏み込むべき「大捜査線」は、いくらでも転がっている。

卒業後も変わらぬ歩幅で、地を蹴って歩いていきたい。

文字の優しさ、知った学生記者

「形が残せてよかったね」
学生記者の経験について、こんな言葉を両親からもらった。
手掛けた8つの取材の中で、感じた思いや感動、そして文章にする時の迷いや葛藤は、記事を読み返すたびに鮮やかに蘇る。

素晴らしい出会いが幾つもあった。真摯に取材に応じてくださった、さまざまな分野で活躍する中大生たち。か

「形が残せてよかったね」



中村 昌太郎

いつも笑顔で対応していただいた広報課の方々をはじめ、教職員の皆さんの優しさは忘れられない。
学生記者の仲間にも恵まれた。尊敬できる部分を持った友ばかりだった。僕はいろいろと迷惑をかけ、お世話にもなったので深く感謝している。途中で学生記者を辞めてしまった友だちもいるけれど、付き合いはずっと続くだろう。
紙とペンさえあれば、いつでもどこでも何かは書ける。僕はこれから「書くこと」と付き合っていく。そして僕がもたらしてきたものを、誰かに伝えられるような文章を書きたい。

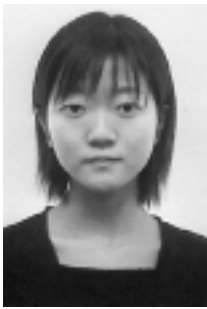
いま思うと、文章を書くことを大の苦手とする私が厚かましくも、よくも学生記者になろうだなんて思ったものだ。

結果的にこの思いつきの行動が4年間の貴重な経験を与えられたのである。

学生記者にはなったものの、先輩が書いた記事をめくっては、ひたすら感心するばかりだった。「いつ、こんな文章が書けるのか」と、逆に

「先日前、大勢の学生記者OBとお会いする機会があった。私よりも何代

限られたスペースとの闘い



木瀬 恵子

プレッシャーともなり、正直いつて、も前の学生記者との初対面だったなかなか踏み出せなかった。結局、私が生徒記者としてデビューしたのは、「白門祭」の記事だった。

多摩動物公園で産まれたアフリカ象「バオ」、シドニーで活躍した水泳選手たち、モノレール開通に先駆けた関係者の座談会、留学生との交流――4年間で担当した取材は、どれも全力でやってきたつもりだ。取

材を通して感じたことは、限られたスペースに必要な内容を納めることと格闘したことだろう。これはなにもにも代えがたい経験だった。私は学生記者になって本当に良かったと思う。どう良かったのか。文章でうまく言い表せない。口でいつでも言い表せない。だから、あえて言わない。

文字の優しさ、知った学生記者

ある日の学生食堂。私の目の前で魚をおいしそうに食べている人がいた。幸せな魚だ。

もちろん、自然の摂理に従って海で生涯を閉じるのが理想だろう。けれど、運悪く網に掛かったり繁殖された魚もいる。そして「あなたの栄養になってやるから、煮るなり焼くなり好きにしな」と潔く料理され、私たちに吸収される。そんな魚に

「なんだよ。栄養どころか毒にも薬にもなっていないじゃんか」と憤慨したが、「そっか。いくら素晴らしい

幸せな魚になる記事書こう



倉田 政美

とって、残さず食べられることは最高の幸せだ。うらやましい。

私の記事も、その魚のように多くの学生たちの栄養になったのだろうか。つまり、大学生活を後押しする力になったのだろうか。

一年生から学生記者として様々な取材をした。講演会や人物ドキュメント、座談会に編集後記、そしてコラムだ。「よくがんばった。感動した」

と小泉流に自画自賛したくなる。

ところが、学生からの反応は想像以上に少なかった。なぜだ、なぜなんだ。すると「大学のこと、あまり興味がないから読まないんだよね」や「えっ、その雑誌はどこに置いてあるの」という身も蓋もない意見もあった。

「なんだよ。栄養どころか毒にも薬にもなっていないじゃんか」と憤慨したが、「そっか。いくら素晴らしい

い記事を掲載しても、アピールしないとダメなんだ。書きっぱなしはダメなんだ」と思った。それなら、学生とHakumon ちゅっおっ』を強く結びつける企画を実現したかったと後悔している。

幸せな魚のように、跡形もなく食べられ栄養となる。記事も、そうあるべきだ。先輩の学生記者は、ぜひ幸せな魚を書いてください。